

学 位 論 文 要 旨

氏 名 村中智彦

題 目 知的障害児の教育臨床における先行操作に基づく課題遂行の促進

本研究は、知的障害児を対象として、個別指導と小集団指導のそれぞれの指導形態の特徴に応じた先行操作を適用し、対象児の課題遂行に及ぼす効果を明らかにすること、また先行操作に基づく個別指導と小集団指導の各プログラムの在り方について提案することを目的とした。

第1章と第2章では、知的障害児を対象とした課題遂行促進のための指導プログラムに関する従来の研究を概観し、課題学習の内容とその指導形態、先行操作とその関連概念、先行操作に基づく指導の特徴、先行操作に関する研究成果について整理した。

第3章では、課題遂行を促進する先行操作について、個別指導における試行間間隔（Inter Trial Interval, 以下、ITI）、セット間の設定、課題の選択機会の設定、また、小集団指導における物理的環境の設定、係による課題遂行機会の設定、対象児同士のやりとり機会の設定に関わる問題の所在を明らかにし、本研究の目的を明示した。

第4章第1節の研究Ⅰ-1では、知的障害児2名を対象として、個別指導において、対象児が任意に課題遂行できるITIである対象児任意遂行条件を実施し、課題遂行の潜時2秒以内の反応数、単位時間当たりの試行遂行数、正反応率を検討した。続く第2節の研究Ⅰ-2では、研究Ⅰ-1の結果を踏まえて、知的障害児2名を対象として、対象児の逸脱反応を防ぎ、課題遂行を高める最適なITIの設定について検討した。第3節の研究Ⅱでは、知的障害児2名を対象として、個別指導のセット間において、対象児が課題準備を遂行することに伴うセット間の逸脱反応に及ぼす効果、及び試行時間における逸脱反応と課題遂行に及ぼす効果を検討した。第4節の研究Ⅲでは、知的障害を伴う自閉症児1名を対象として、個別指導において、課題の選択機会を設定し、対象児自らが課題の選択を行うことそれ自体が課題遂行を高めるかどうかについて検討した。

第5章第1節の研究Ⅳでは、知的障害児5名の小集団指導において、指導室内の机や椅子の配置、視覚手がかりの活用といった物理的環境設定の改善が対象児個々の課題遂行や逸脱反応に及ぼす効果を検討した。また、物理的環境設定の改善を行った上で、係の設定が対象児の課題遂行機会を増やすかどうかを分析し、係の設定が可能になる条件や適切な指導手順について検討した。第2節の研究Ⅴでは、研究Ⅳの成果に基づき、指導室内の物理的環境設定と係の設定を先行して行い、その上で、指導者ではなく、対象児同士がお互いに弁別刺激と

なる視覚手がかりの導入，及び指導者の位置取りの変更がやりとり反応に及ぼす効果について検討した。

第6章第1節では，研究Ⅰ～Ⅲの結果に基づいて，個別指導における先行操作と課題遂行に及ぼす効果として，ITIの設定とその効果，セット間の設定とその効果，課題の選択機会の設定とその効果について考察した。第2節では，研究Ⅳ～Ⅴの結果に基づいて，小集団指導における先行操作と課題遂行に及ぼす効果として，課題遂行機会の設定とその効果，やりとり機会の設定とその効果について考察した。第3節では，先行操作に基づく指導プログラムとして，個別指導のプログラム及び小集団指導のプログラムについて総合的に考察した。

第7章では，本研究の結論として，個別指導に関して，ITIの設定は対象児が任意に課題を遂行できる条件が最適であること，セット間では，対象児が課題準備を行うことにより逸脱反応の生起を防ぐことができること，また，対象児が課題の選択を行うこと自体が課題遂行を促進することを指摘した。一方，小集団指導に関して，物理的環境設定の改善は課題遂行の自発を促す弁別刺激となり，課題遂行に要する反応努力を下げ，逸脱反応を生じにくくすること，及びそれに基づく係の設定は対象児同士のやりとり機会を増加させること，対象児同士のやりとり機会において，視覚手がかりを導入したり，指導者の位置取りを変更したりすることにより，指導者のプロンプトに依存しない自発的なやりとり反応が促進されることを指摘した。従来の先行研究では，まず個別指導を行い，その後に小集団指導へと展開するプログラムの適切性が示唆されていた。しかし，以上のような本研究の結果より，両指導形態では対象児の課題遂行や逸脱反応の生起に影響を及ぼす先行条件が異なり，各指導形態の特徴に応じた先行操作の導入が必要であることが示された。